

令和4年度 学校評価書 (計画段階・実施段階)

福岡県立福島高等学校(全日制)

自己評価				
学校運営計画(4月)				評価(総合)
学校運営方針	校訓「正大」「剛毅」「優美」を胸に、自己実現のために努力を重ねるとともに、身に付けた豊かな人間力で社会に貢献する高い志を持つ人を育成する。			
昨年度の成果と課題	年度重点目標	具体的目標		
<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新型コロナウイルス感染症対策に取り組み、徹底することができた。</li> <li>広報活動を強化に取り組み、本校の魅力を発信し続けた結果、志願倍率が有意に改善した。</li> <li>コロナ禍の制約の中で、学校行事の新しい形を模索した結果、生徒の創造性、協働性が高まった。</li> </ul> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の実態を踏まえた、わかる授業の追求と多様な生徒を多面的に評価する取組が十分ではなかった。</li> </ul>	生徒と教師が「自ら考え、自ら判断する」機会の充実	「なぜ学ぶのか」、「なぜ教えるのか」、「校訓とは何か」といった良質かつ本質的な問いかけを行い、自分が判断し、主体的に関わっている(自分事)と思える状況を積極的に創り出すことにより、生徒が手ごたえを感じる学校生活と教師が本当にしたい教育に集中できる環境をつくる。生徒と教師双方の達成感と生徒の自己肯定感を高める。		
	観点別評価の活用と「授業で勝負する」意識の高揚	生徒の特性と実態を踏まえ、わかる授業を追求するとともに、新たに「観点別評価」を取り入れることにより、指導と評価の一体性を高め、多様な生徒の資質を積極的に評価する。		
	全教育活動における「量」から「質」への転換と働き方改革	個々の教育活動の目的や意義を更に明確にし優先順位をつけて、効果的に「スクラップ・アンド・ビルド」を行う。単なる引き算ではなく、本当に大切なものは何かを見抜き、そこに集中することをおして、教師が心身ともに健康で教育活動に注力できるよう、超過勤務時間の更なる削減を推進する。		
	安全・安心の学校づくりと開かれた学校づくり	地域と連携し、感染症や災害など、起こりうる危機を生徒が自分のこととして捉える意識を高揚させる。また、地域や中学校等と連携し、本校の魅力ある教育活動や生徒の姿を「もちの木」などの広報誌やホームページやSNSにより積極的に発信し、生徒募集の更なる充実を目指す。		
評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)	次年度の主な課題
教育推進部(教務課)	学力向上(「わかる授業」から「できる授業」へのレベルの向上)	幅広い学力を持った多様な生徒に対応した「分かる授業」を実施するとともに評価の妥当性を向上させる。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学力を付けるのは、全員が受講する「授業」であるという意識を再構築した上で、企画・研修課と連携してICTを活用した授業を推進する。</li> <li>○長期休業中における集中講座の実施に伴い(進路指導課と協働)、学習指導の計画全体を見直し、授業改善を図る。</li> <li>○学校設定教科・科目の実施に向けた検討が遅れたが、年間授業計画とルーブリックは完成できた。今後は授業が円滑に進められるよう理念の継承を図り、共通認識を持って進める。</li> <li>○適正な評価を行うために学期毎に教科間で評価方法を検討し、指導と評価の一体性を図り、観点別評価の妥当性、信頼性を高める。</li> <li>○各教科・科目で身に付けた知識・技能を総探で活用させたり、総探で身に付けた見方・考え方を各教科の授業で働かせたりできるよう、組織的かつ計画的な取組を推進する。</li> <li>○学年を越えて学習の成果が円滑に接続されるよう工夫する。</li> <li>○外部との連携が定着するよう事前指導を徹底する。</li> </ul>
		「できる授業」を目指した「主体的・対話的で深い学び」を促進する授業を、企画・研修課と連携して実践する。	B	
		週課題を各教科の実態に合わせて運用し、学習時間調査(年4回)による検証を行う。	A	
	新学習指導要領における教育課程の実施に係る具体的準備と観点別評価の推進	新設学校設定教科・科目の目標と学習内容、指導の具体的内容を完成させる。	B	
		教科内・教科間の意思疎通の促進を通じた教科横断的指導体制を構築する。	B	
		観点別評価を実施し、授業改善を図る。(指導と評価の一体化)	B	
「総合的な探究の時間」のさらなる飛躍と継承	「総合的な探究の時間」で育成する探究のプロセス(課題設定・情報収集・分析、まとめ・表現)を各教科・科目内でも実態に応じて実施する体制を整備する。	B		
	推進委員会を中心として「総合的な探究の時間」を円滑に運営する。(早めの計画立案、密な連絡調整)	A		
	外部機関との連携を強化して探究活動を充実させる。	A		
教育推進部(入試・広報課)	様々な層に向けた広報ツールの活用	生徒の意見を反映させ、本校の良さが存分に伝わる学校案内を作成する。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校案内作成は、早い段階から多くの人と協力しながら取り組む。</li> <li>○各広報資料やホームページ、SNSは効果的に活動できたが、今後はより詳しい分析を行い、どのツールをどのタイミングでどのように活用するかをより明確にする。</li> <li>○在校生の情報に関する資料や、説明会の際に生徒に協力してもらうなど、在校生の生の声が伝わる工夫をする。</li> <li>○各説明会後の振り返りを十分に行い、次の説明会をよりよいものにしていくとともに、説明会担当者同士でロールプレイングを行うなど、説明会担当者のスキルアップも図る。</li> <li>○課内での情報の共有や認識の統一が十分にできていなかったため、分掌会を定期的で開催するなど、全員が責任感を持ち業務に取り組む体制を作る。</li> <li>○早めの業務着手のために、行事の度にスケジュールを確認し、いつまでに何が必要なのかを意見を出し合い計画する。</li> </ul>
		「もちの木」「アピールポイント」「学びマップ」「進路先一覧」など、各部署の意見を取り入れながら効果的な資料を作成する。	A	
		ホームページ・SNSそれぞれの利点を生かした更新を定期的に行う。	A	
	参加者の満足度を高めるPRの工夫	中学校訪問では在校生の情報提供などを通して連携を深めながら、話を聞いた人が他の人に共有したくなるような内容を考える。	B	
		中学生体験入学・中学校PTAなど外部からの来校には、全職員で受け入れる心構えで、最適で丁寧な対応を心掛ける。	A	
		県立高校合同説明会・中学校等関係機関での説明会では参加後の振り返りを行い、さらによりよいものを検討する。	B	
	計画的で協働的な入試業務の遂行	先を見越した早めのスケジュール管理で各業務を滞りなくミスなく行う。	A	
		課内での情報の共有・認識の統一を徹底し、1人1人が責任感を持ちチームで入試を作る。	B	
		他分掌と連携を図りながら、学校全体で業務に当たる体制を整える。	A	

学校関係者評価	
評価(総合)	自己評価は
	<p>A : 適切である</p> <p>B : 概ね適切である</p> <p>C : やや適切である</p> <p>D : 不適切である</p>
項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)		次年度の主な課題	項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見			
キャリア教育部 (進路指導課)	キャリア教育の充実による「夢を描き努力し続ける生徒」の育成	学校内外における進路ガイダンスの実施及び面談を通して、進路意識の向上を図る。	A	B	B	○進路ガイダンス実施に向けた学校内外の調整を図り、実施時期の見直しと内容の更なる充実を目指す。 ○本来の「Classi」の導入目的であった、キャリアパスポートとしての利用について教員の共通理解を図り、より効果的に活用する。 ○体験活動の事前指導と事後の振り返りを充実させ、体験活動の質を向上させる。				
		「Classi」を活用して学校行事や進路学習等の見直しと振り返りを行い、自己の生き方や進路を考える場を設定する。	B							
		ボランティア活動、インターンシップ等の体験活動を通して勤労感・職業観を涵養する。	B							
	第一志望の進路実現に必要な心構えの育成と基礎学力の向上	進路実現に必要な基礎学力の向上に資する課外授業や模試を実施する。	B	A						
		小論文指導の充実を図り、希望進路の明確化とその実現に必要な「読む力」「考える力」「書く力」を伸ばす。	A							
		就職・公務員希望者に向けたガイダンスや面接指導等を早期に実施するとともに、外部講師を招聘して内容の充実を図る。	A							
進路選択をサポートする情報の収集と発信	「進路のしおり」の見直しを図り、改訂版を早期に発行して進路指導に活用する。	B	C	B	○進路実現に必要な学力向上を目指し、教務課と連携して授業改善及び長期休業中の講座の充実を推進する。 ○小論文指導に係る外部研修会への参加奨励や情報提供等により、教員のチームによる指導体制の充実と指導内容の質の向上を目指す。 ○外部講師を活用したガイダンス及び特別講座等を計画的に実施することで、就職・公務員希望者への指導の充実を図る。 ○「進路のしおり」改訂業務に携わる教員の数を増やすことで、業務負担軽減と内容の充実を図る。 ○進路指導課の教員のチーム力向上を図り、「進路だより」の定期的な発行および進路委員の活発的な活動を目指す。 ○進路指導課会議を定期的開催し、情報共有や意志疎通を図りながら教員の連携を強化する。					
	生徒に対し同窓会や地元企業の声を反映した「進路だより」を発行して、情報の発信と進路意識の向上を図る。	C								
	進路委員の活動を活性化させ、全校生徒の進路への取組に対する主体的な参加を促す。	C								
キャリア教育部 (企画・研修課)	生徒・教員の成長を促す行事の実施	各行事を行うにあたり、教員側と生徒側の目的・目標を明確にし、それらを全職員に浸透させる。	B				B	B	○各行事の計画については早期に立てることができている。役割分担については、変更等が生じた場合も含めて臨機応変に対応できるようにする。 ○他分掌・係と連携は取れている。行事後のアンケートを生かし、よりよい形へ改善していく。	
		各行事の計画を早期に立て、課内の役割分担を明確にし、効果的な行事の実施に向けて一丸となり取り組む。	B							
		他分掌・係と綿密に連携を取り、より意義ある行事を実施する。	B							
	研修・図書館利用の活性化	年度当初の研修計画も踏まえつつ、本校の実状や課題に応じ、他分掌と協議しながら臨機応変に研修を実施する。	A	B						
		校外研修を積極的に告知し、参加を促す。	B							
		生徒主体の図書委員の活動を行い、授業での図書館活用を案内する。	B							
新たな学びプロジェクトの最大活用	プロジェクトメンバー間の連携を高め、学校全体で情報共有できる体制を整える。	B	B	B	○学校全体での情報共有が少し弱かったため、今年度の方法を再確認し、体制を見直す。 ○授業改善を促すために、他校の取り組み等についても積極的に情報を共有する。					
	活発な授業改善を促すために、授業参観や授業アンケートを十分に活用する。	B								
	プロジェクトの計画を綿密に立て、効果的な実践・教員へのフィードバックを行う。	B								
生徒育成部 (生徒指導課)	部活動・生徒会活動の活性化	部活動顧問を中心に、生徒の能力を最大限に発揮させる指導を行い、生徒の意識を高めて、積極的に部活動に取り組ませる。	B				B	B	○生徒数の減少に伴い、各部活動の部員も減少している。生徒の意識を高める方策を工夫して、目標設定を高く持たせる。それによって質の高い部活動ができる。福島高校の中の部活動の重要性を再考しなければならない。 ○来年度の体育大会のリーダーの発掘を早急に行う。	
		部活動・生徒会活動の取り組み・実績をまとめ、生徒募集に生かす。	B							
		リーダーの発掘と育成に力を入れ、体育大会・福高祭を充実させる。	A							
	問題行動・いじめの撲滅	いじめアンケートを実施し、情報を共有する。	A	A						
		思いやりの心を持った生徒の育成指導に努める。	A							
		福島高校生としての自覚を持たせ、正しい行動ができるように指導する。	A							
交通事故防止・交通マナーの向上	登下校指導の実施し、交通マナーの意識を向上させ、交通事故0を目指す。	B	B	B	○登下校指導ができる体制を工夫する。 ○自転車乗車中のヘルメット着用が努力義務化となるが、ヘルメット着用の安全性を保護者を含めて、理解させる。 ○交通マナーの意識の向上を図る方法を検討する。					
	安全教育講習会やバイク実技講習会を実施し、安全に関する意識の向上を図る。	B								

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)		次年度の主な課題	項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見			
生徒指導部 (健康管理課)	生徒及び職員の心身の健康の保持増進	各種健康診断を実施し、年度当初における生徒の身体状況の基礎的な把握を行う。	A	A	○今後も続くコロナ禍での危機対応に、見直しをもって対応する。 ○健康診断、健康相談等を的確に行い、その後の生徒及び職員の健康の保持増進に努める。					
		学校・学年行事等に際して事前健康相談を実施し、生徒の心身状況を把握し報告する。	A							
		新型コロナウイルス感染防止に向けて、啓発活動を行う。	B							
		保健だよりを月1回発行し、健康や事故防止に関する注意喚起を行う。	A							
		性と心の相談事業(1年生対象に性の講演会)を実施する。	A							
	学校管理下での事故防止の徹底	生徒保健委員による救急法(含む熱中症対策)講演会を実施し、部活動や体育大会等の体育的行事における安全対策(熱中症予防対策等)を充実させる。	A	B				A	○生徒保健委員会と生徒美化委員会の活動をさらに活発にする。 ○安全点検実施・危機管理マニュアルの周知徹底を図り、危機管理体制を整える。	
		生徒美化委員を中心に、校内美化と学習環境の整備を図る。	B							
		防災避難訓練を充実させ、防災意識の向上を図る。	B							
		学期に1回の校内安全点検を実施し、危険箇所を把握するとともに担当部署に連絡・働きかけを行う。	B							
		危機管理マニュアルを作成・配布し、職員に周知徹底し、危機管理体制を整え、啓発する。	B							
	担任・学年・教育相談委員会の連携・協力体制の確立	様々な問題を抱えた生徒に対し、学校全体で支援等を検討するために『教育相談委員会』をSC来校に合わせ月1回開催する。	A	A						○担任・学年・教育相談委員会の連携・協力体制を構築し、様々な問題を抱えた生徒に対して、適切に対応する。
		生徒の保健室利用状況をクラス担任に毎日報告する。	A							
		3日連続欠席者に対して、実態に応じて担任・学年団により家庭訪問を実施する。	B							
		SC・SSW・訪問相談員による相談事業を実施する。	A							
		修学支援・特別支援コーディネーターによる業務を支援する。	B							
第1学年	基本的生活習慣の確立	時間厳守、清掃の徹底、挨拶の励行を心掛け、日常的に教師・生徒が一体となって活動を行う。	B	B	○時間管理の徹底をさせるために、手帳を有効活用し、生活習慣の振り返りと提出物の期限厳守をさせる。 ○掃除・挨拶に関しては教員が率先しておこない、生徒の模範となる。 ○教室内の棚の配置を再考し、教室内の環境を整える。 ○時程や学校行事の流れを掲示した際には、必ず生徒自身に確認をさせ、教員頼みにさせない。 ○課題提出の徹底をさせるため、教科担当者と担任とが密に連絡を取り、連携して指導する。 ○大学進学を目指す生徒に関しては、個別に課題を与え添削をするなどして、学力の向上を目指す。 ○学年集会や行事の在り方を見直し、企画や進行を生徒に任せていく。 ○修学旅行に関連付けた震災学習を通して、個人及び集団としての成長をさせる。 ○進路について調べる機会、外部の方から話を聞く機会を増やす。 ○担任団と進路部で連携し、一人一人についての進路実現に向けた戦略を立てる。 ○学年会だけでなく、日常的に教員同士で生徒の情報共有をする。 ○授業やHRで気になる生徒がいれば、速やかに担任・学年団で対応していく。					
		皆勤者50%以上をクラス目標に設定し、安易な欠席や遅刻をしない取り組みを行う。	B							
	落ち着いた学習環境づくり	バッグ掛けや机上の整理を指導するとともに、掲示物の整理に配慮する。	B	B						
		次の行動を予測して準備できる生徒を育成する。	C							
	基礎学力の向上	クラスの特徴を生かした授業を展開し、生徒の学力向上を図る。	B	B						
		課題提出の徹底を指導し、学習する習慣を生徒につけさせる。	B							
	生徒の主体的活動を図る方策の策定	生徒を学年行事の企画・運営に関わらせ、学校行事への積極的な活動に繋げさせる。主体的な活動を通して、生徒の連帯感や自立心を育成する。	B	B						
	進路目標の早期設定	漠然とした希望やあいまいな情報しか持たない生徒に対して、細かい情報を与える機会を多く持ち、進路実現への道筋の立て方を共に考える。	B	B						
		進路教材や面談を用いて進路について熟考させるとともに、外部の方の話を聞く機会を持たせる。	B							
	教師団・学年団及び保護者との連携強化	学年団(特に担任団)でこまめに話し、生徒の人間関係や進路希望について学年全体で把握をし、的確なアドバイスや助け合いを行う。	B	A						
保護者と密に連絡を取り合い、生徒の出席状況、成績、学校での様子、家庭での様子等、相互に把握し、生徒の精神的安定や進路指導に繋げる。		A								
第2学年	基本的生活習慣の定着	挨拶の励行、時間の厳守(5分前行動)、服装を整える、清掃をきちんとするなど基本的なことを徹底して指導する。	B	B				○時間を守る・挨拶をする・服装を整える・掃除をきちんとするなどの基本的なことを更に徹底して指導していく。 ○皆勤者(2学期まで59人)については、次年度目標を達成するように指導をしていく。 ○各教科の提出物等を必ず出させ、家庭学習時間100分以上を目標に次年度指導をしていく。(2学期まで87分) ○補充授業を徹底するなど、成績不振者(1・2学期2人)の減少に努める。 ○校外模試総合偏差値50・GTZB2以上の生徒10名以上を目指す。(2回スタサポGTZB2以上3人、11月進研模試総合偏差値50以上1人) ○HR(進路学習)などを通して、早期に生徒の希望進路の決定をする。 ○次年度は生徒会役員を中心に学校行事などに積極的に参加させ、リーダーシップのとれる生徒を育成する。 ○あらゆる場面で人権について話をすることで、いじめのない学年・学級をつくっていく。 ○学年会議を毎週行い、学年団の共通理解を図っていく。		
		心身の健康に努めさせ、皆勤者65名以上を達成する。	C							
	基礎学力の向上	各教科と連携して小テストや課題など家庭学習時間を増やす取り組みをし、基礎・基本的学習内容の習得を図る。	B	B						
		各教科の提出物を確実に出させ、家庭学習時間1日平均100分以上を達成する。	C							
	進路意識の向上	HRや面談週間・三者面談などを通して、生徒の進路目標の早期設定を図る。	B	B						
		オープンキャンパスやインターンシップなどへの積極的な参加を促し、生徒の進路意識を向上させる。	B							
	主体的に行動できる生徒の育成	中堅学年として学年行事・生徒会活動・部活動等に積極的に参加させることにより、リーダーとしての自覚を持たせる。	B	B						
		学校行事の意義や目的を理解させ、意欲を持って積極的に参加させるとともに、リーダーシップのとれる生徒を育成する。	B							
学年団のチーム化	学年会議を毎週行い、学年団の共通理解を図り、学年全体で生徒の支援・指導をしていく。	A	B							
	学校生活アンケートやいじめアンケートなどを通して、気になる生徒の教育相談を行うなど、いじめのない安全・安心な学年・学級づくりをする。	B								

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)		次年度の主な課題	項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見		
第3学年	第一希望進路の実現	進路指導部と協働して進路意識を向上させ、就職率100%及び個々に適した入試による第一希望進路の実現を目指す。	B	B	○3年生になっても進路希望が定まっていない生徒が、見受けられた。そのような生徒は学習に対するモチベーションが上がらず、学習時間の低下につながった。この反省をふまえ、次年度は、生徒が早期から進路意識を高めるための情報の提供や個人面談を定期的に行っていく。				
		個人面談を定期的に行い、個に応じた情報の提供や心理的なサポートを行う。	B						
		授業への集中力を高めさせるとともに、平日2時間、休日3時間以上の家庭学習を継続できるよう指導する。	C						
	最高学年としての自覚と誇りを持った生徒の育成	各式典や全校行事において、最高学年に相応しい態度と心構えで参加させる。	B	B				○遅刻者が多いため、回数が多い生徒に対しては学年の生徒指導部から指導を行ったり、保護者に学校に来ていただき面談を行ったりしたが、あまり改善が見られなかった。次年度は基本的な生活習慣の確立を目指し、学年団が共通理解のもと一致団結して指導にあたる。	
		目的や課題を明確に示し、学年のリーダーを中心に活動する場を設定する。	B						
		挨拶・時間厳守・清掃活動等の凡事徹底を図る指導を行う。	B						
	学年団の一致団結	社会の変化を敏感に捉え、教員相互の意志疎通や情報交換を積極的に行う。	B	B					○学年会議をととして各クラスの生徒に関する情報交換や意思疎通を積極的に行ってきた。次年度も引き続き、生徒が安心して落ち着いた学校生活を送ることができるよう、生徒へのきめ細かな指導および教員同士の日頃からの情報交換を密に行う。
		学年会議を毎週実施して現状を把握し、課題と方策を共有して組織的改善を図る。	A						
		生徒や保護者、職員相互の信頼を高め、安心・安全な教育環境づくりに努める。	B						
総合ビジネス科	基礎学力の定着と高度な資格取得に基づく進路目標の実現	全国商業高等学校協会主催検定において、ビジネスの基礎となる検定(3・2級)の全員合格を目指す。	A	B	○全国商業高等学校協会主催検定において、3級・2級の各科目は、80%以上の合格率を目指す。 ○四年制大学志望者には、早期からの小論文指導を実施し、入試問題対策の指導の充実を図る。 ○地域ビジネスコースと経営ビジネスコースの目標を明確にし、生徒の希望する進路目標とする。				
		全国商業高等学校協会主催検定において、生徒各自の得意とする検定に挑戦させ3種目1級表彰者数20名以上を目指す。	B						
		日商簿記検定など高度な資格取得への挑戦を促すとともに、小論文指導や面接指導等を早い時期から実施するなど、進路指導の充実を図る。	A						
	地域社会の探究と職業人としてのモノの見方と考え方の育成	職業人として言葉遣いやビジネスマナー等の指導を行い、その重要性を考える機会を設定する。【社会人特別講師招聘事業(1・2年生1回)・3年生3回】	A	B				○社会人招聘授業を通して、社会人としての考え方、職業人としてのビジネスマナー教育を実践も継続して行う。 ○地域の大学の連携事業として、久留米大学での共同講義や八女市白壁通りでの現地での地域産業連携事業は、今後も継続して行い、地域への課題や関心を持たせる。	
		地域の商工会議所や大学及び関連企業と連携をとり、地域経済の現状やビジネスに対する心構えを学ばせる。【大学訪問(1・2年生)・地域産業連携事業(1・2年生1回)】	B						
		地域社会について課題を設定し探究活動を行い「総合ビジネス科実践発表会」等でその成果を発表することで、キャリア教育の充実を図る。	B						
	地域社会との連携と広報活動の充実	各学年の学習活動や進路状況を「総合ビジネス科ニュース」に記載し、地域の中学校および生徒や保護者へ情報発信を行う。(年5回)	B	B					○総合ビジネス科ニュースは、科の活動内容を中学生および生徒・保護者等に知らせるために、内容を再度見直し、内容の充実を図る。 ○「課題研究」等で、地域のイベントに積極的に参加し、地域の人々と交流する。そこで学校および総合ビジネス科の活動をアピールし、地域活性化の貢献を目指す。
		総合ビジネス科の学習内容と学校生活の様子を、中学校における出前授業や進路説明会等で丁寧な説明を行う。	B						
		「課題研究」等授業の一環で、地域のイベントに積極的に参加し体験的な学び学習成果の発表の場とする。(年2回以上)	B						
生活デザイン科	教科における専門性の向上と観点別評価の実践	基礎学力の定着と観点別評価を主とした多面的な評価を実施することで授業の質を高め、生徒の学習意欲と学力を高める。	A	A	○基礎学力定着のための家庭学習の習慣確立と指導、生徒の学ぶ意欲を育む授業実践の改善を図る。 ○新教育課程のカリキュラムに応じて取得する家庭科技術検定と専門性を高めるための特色ある学習内容を見直す。学科で受検する家庭科技術検定においては合格率90%以上を目指す。 ○外部講師講座や上級学校訪問など各学年・コース別において充実した内容で取り組むことが出来た。今後も進路に関する意識付けを1学年より学科で計画的に実施し、キャリア教育の充実を図る。 ○学科の授業や活動、行事を中心とした協働学習を活用し、主体的に学ぶ生徒を育成する。 ○来年度に向けて地域連携事業(八女茶探究・商品開発・餅プロジェクト等)の立案を行い、新たな取組への検討を実施する。 ○学科の広報活動においては効果的に行うことが出来ているので、次年度も各行事において速やかな広報と情報発信を展開し、生徒募集に向けて積極的に活動する。				
		家庭科技術検定など授業で学んだ知識・技術を生かした検定取得に積極的に挑戦させ、土曜講座等を活用し、コース別合格率90%以上を目指す。	B						
		専門性の向上のために、社会人招聘事業や未来を切り拓く人材育成事業の活用を通して、3つのコース毎の特色化を図り、専門性を高める。	A						
	キャリア教育の推進と進路目標の実現	外部講師講座や上級学校訪問など、自己の進路を考えさせる機会を各学年において設定し、進路目標の明確化を図る。	A	B					
		職業人として言葉遣いやマナー等の講座を実施し、体験活動やキャリア教育を推進し、勤労観・職業観の育成を図る。	B						
		他者と協働して行う取り組みや課題研究発表会の探究活動を通して、コミュニケーション能力の育成や自己肯定感の向上を目指す。	B						
	地域社会への貢献と広報活動の充実	地域行事や地域交流の新たなあり方を見直し、感染対策を講じた上で、可能な方策を具体的に検討し実行する。	B	A					
		生活デザイン科新聞やHP更新など広報活動を行事毎に積極的に行い、中学生や保護者・地域の方に生徒が活躍する姿を発信する。	A						
		進路相談事業・中学校への出前講座・体験入学・産業教育フェア等を活用し、生活デザイン科の特色を活かした生徒募集を積極的に実施する。	A						

自己評価及び学校関係者評価を踏まえた今後の改善策

--

評価項目以外のものに関する意見

--